

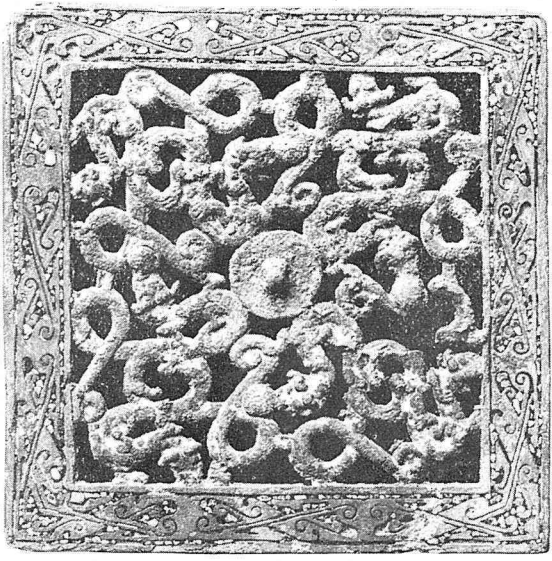
## 近時所見の漢以前の古鏡

梅原末治

### 一

大正の末年から一部人士の注意に上る様になつた漢以前の古鏡に關して、幸に當初からそれ等を屬目するに特殊な便宜を持つた私は、去る昭和十一年に『漢以前の古鏡の研究』（東方文化學院京都研究所研究報告第六冊）なる研究報告を書いて、蒐め得た關係遺品の聚成と、それから導いた性質觀とを録したのであつた。從來前漢鏡より遡る鏡式に就いて殆んど知見を缺いてゐたものが、昭和の最初の數年間に支那の各地からかくも夥しい實例を發見して、この様にその全貌が確められるに至つたことは、なかい支那古鏡鑑研究の沿革史上まさに劃期的なものと云ふ可きであつて、かゝる機會に出遇ふて、その知

見を纏め得たことに對しては私かに愉快の念を覺えた次第である。右の書の印行後間もなく支那事變が勃發し、年を重ねて遂に大東亞戰を見るに至つたが爲に、支那本土に於ける關係遺品の出土はその以前に較べて著しく減じたことではあるが、この種鏡鑑に關する關心が單に本邦のみならず、廣く世界の東洋學界に行き互り、一昨々年瑞典の東洋博物館紀要にカールグレン教授 (Bernhard Karlgren) が “Huai and Han” なる關係論文を掲載するあり、また支那本土にあつても前者に先立つて着手一昨年完成を見た梁上椿氏の『嚴廬藏鏡』に若干の新考察を見る等して、活潑な動きを示しつゝある。是等の論著は上記の拙著に基きながら、それに新資料を加へて、その性質觀を更に開展することに意を用ゐて居て、うちに多



一邊長四寸二分

1 安徽省壽縣出土蟠螭透文嵌石文鏡



2 蟠螭透文鏡

徑七寸三分

圖版第二

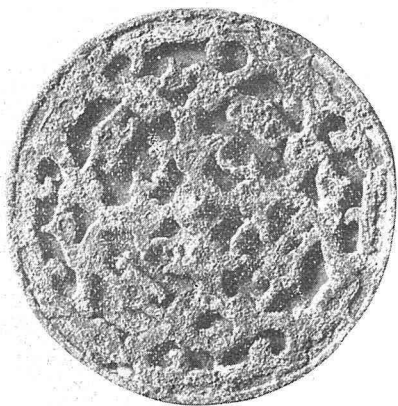
1 河南洛陽出土賦彩三虺透文鏡



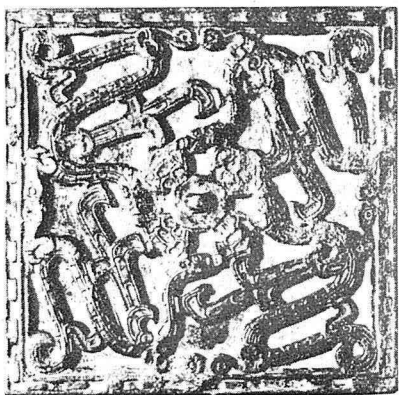
3 四夔透文方鏡



5 蟠螭透文鏡



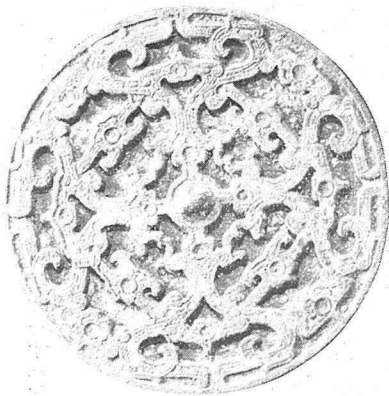
2 四虺透文方鏡



4 四夔透文方鏡



6 蟠螭透文鏡





1 雙獸鈕細文鏡

徑三寸一分餘

2 子安貝文帶細文鏡

徑三寸



3 花葉座鈕蟠螭子安貝文鏡

徑三寸



圖版第四

1 河南洛陽金村古墓出土獸形細文鏡（其一）



徑四寸四分

2 同 上（其二）



徑四寸六分

一  
邊長  
四寸  
八分



1  
饕餮  
文方  
鏡

徑  
四寸  
六分

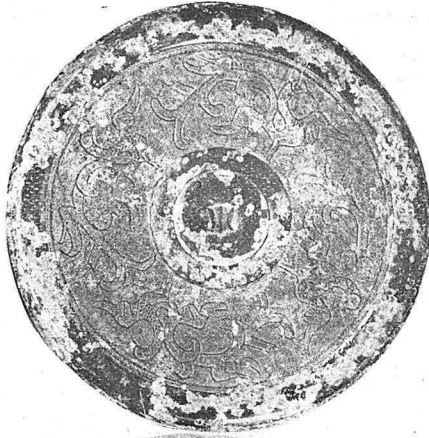


2  
羽狀  
獸文  
地四  
山四  
獸鏡

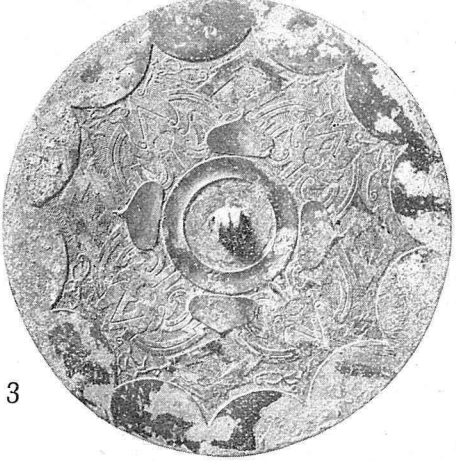
2



1



3



- 1. 徑 六寸二分
- 2. 徑 五寸三分
- 3. 徑 六寸四分
- 4. 徑 六寸一分

4



くの示唆を含んでゐる點では、一昨年公にせられた我が後藤守一氏の『古鏡聚英』上篇(秦鏡と漢六朝鏡)が全く拙著の紹介に過ぎないと撰を異にするものであり、海外學者のこの分野に關する右の精進に對して、古鏡の研究に特殊な地歩を占めるとする本邦學界がまさに關心を新たにする要を覺えざるを得ないのである。

筆者の過去數年間に實見した遺品は上記の一般的傾向から左程多くないのであるが、その間に新たに知り得た鏡式なり、關係事實なりが若干存する上に、また右の二著に刺戟せられ等して別に考へ及んだ點もないではないから、こゝに本誌寄稿の責を負ふことになつたのを機會に、一應新資料を整理の上それ等の紹介を主とし、附するに二三の所見を以てして、嚮の拙著の補遺に當てることにした。前者との併觀を得ば幸である。文のはじめに當つて、掲ぐる所の新資料類の調査に就いて便宜を與へられた諸家、特に故黒川幸七翁、江口治郎氏、山本信夫氏、川合定治郎氏、淺野楳吉氏、田中吉次郎氏等に對して豫め謝意を表する。

## 二

知見に上つた漢以前の古鏡の特色の一つに透文を以て鏡背を飾ると云ふ二重造りのものゝある事は、嚮の拙著で若干の實例を擧げて指摘して置いた所である。尤もこの類はなほ出土例が左程多くない點で、他の類との系統關係など考へ得ない爲でもあらうか、カールグレン教授の論文には殆んど觸れる所がなく、梁氏の著述にも載せる所がない。併し筆者が爾後知り得た遺品は數面に上つて、この類の性質に就いての考査に役立つものゝあることを思はしめるので、中でその主要な遺品から先づ實物の紹介をはじめることしよう。

第一は昭和十一年初夏に本邦に齎された蟠螭透文嵌石方鏡である。これは安徽省壽縣の出土と傳へて、白綠に近い水中古の色澤をなし、同時の發見品として珍らしい銅製の藥研一具が共に將來せられた。鏡は一邊の長四寸二分に近い方形であつて、その透文から成る鏡背の構圖は既に知られた嘉納氏白鶴美術館收藏の一鏡(漢以前の古鏡の研



究「圖版第 三五の 3」)と相近いが、本例にあつては肉を持つた虺龍形の表現が一層平面的な趣を示して居り、またその外帯の上に著しく渦文化した一種の變様獸文を鑄沈め、文様間に青石を嵌込んで裝飾した點が違つてゐる。右の圖文は圖版第一の 1 に示すが如くて、それはこの種鏡の占める位置を考へる上に役立つものと思ふ。なほ以上の鏡背に嵌め込んだ鏡面自體は徑四寸厚さ一分以下の薄い白銅造りであつて、十數片に破碎してはゐるが、復原が可能であり、その原形をとゞめた鏡背の透文に接する部分に絹布の附着殘存してゐるのが認められる。鏡面に絹や麻などの布帛片の附着することは、古墓に副葬せられた鏡に普通見受ける處であつて、それ等が副葬の際に於ける布帛で包んだ名殘であらうことは今日では一般の常識となつてゐるが、この様な鏡體構成の内面に殘存する事實は、鏡の作りの特殊な點と聯關して、その然る所以が新しく問題となるであらう。處が後段に擧げる完形を存した透文の一鏡でも、同じ位置に同様な痕跡が認められる點から、この種の透文鏡にあつてはもと同部に絹・麻等

を張つて、透文間を通じてその色彩等を觀ると云ふ裝飾法が行はれたのではなからうかとの推測を加へしめるのである。この鏡其後轉じて紐育のウインスロップ翁 (J. Winthrop) の有に歸し、破碎してゐた鏡面が復原されたと云ふ。

第二またウインスロップ翁の新收に係る蟠螭透文鏡である。本鏡は徑七寸三分あつてこの種の遺品としての最も大きなものに屬する。鏡體をなす二つの部分のうち、背部の透文は中央に古拙な三葉形の座飾があり、その葉間と縁の右に對應する部分とに各三つの虺龍の頭部を配して、それ等の體軀を一種のアラベスク風にからませて、怪異な獸文を以て巧みな圖文とした所に構圖の見る可きものがある。なほこの透文の處々と外縁の帶上とは半球形の象嵌を加へて、裝飾を複雑ならしめてゐるのである (圖版第 二の 2)

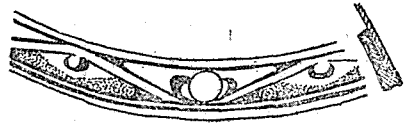
その三に數ふ可き遺品は昭和十一年の秋淺野樸吉氏が北京で手に入れて内地に將來、翌春故黒川幸七翁の有に歸した賦彩三虺透文鏡とする。これは河南省洛陽近郊の

出土と傳へて、有名な金村古墓との關係を考へしめるふしがあるばかりでなく、同一範で作られたと思はれるものが二面揃ふて居り、一面は原形の儘完存、鮮かな古色をとゞめ、他は離脱した鏡面をもとに復した際の修補はあるが、鏡背部は同じく本來のまゝの色澤を存して、共に透文上に施された賦彩をよく遺存するのが珍らしい。

鏡は徑三寸四分餘の小さいもので、これが鏡背部をなす透文は圓座鈕を中にして周邊に三個の虺龍をからませた式であり、虺龍形の示す所第二の鏡に相近く、既知の同種の資料と併觀することから、自からこの類が當代鏡式として相當な數量の鑄造せられたらうことを推測せしめるのである。この點からすると本例は漸次遺品を加へつゝある透文鏡としての新たな二面と云ふに過ぎないわけであるが、他方稀に見る良好な保存状態に負ふて、完全な一面の透文下に上段に觸れたと同じ麻布様の織物が附着残存、もとの種のものを透文の下に張つたことを新たに想定せしめるに役立つと共に、大まかに力勁く鑄出された薄肉の虺龍上に施された賦彩を辿り得ることが、

外縁帯に描かれた彩色の帯文と併せて よく本來の色彩美を傳へる點で、また注意せらる可きものとする。

珍らしく本來の面影をとゞめた右の鏡背上の賦彩は墨



第一圖 賦彩三虺透文鏡緣彩文  
(黒線は朱 點線は綠色)

や朱を以て虺龍形の上に細部を描き足し、これに朱や青綠色を加へたもので、一部には龍體の鱗狀文がはつきりと認められる。またその外區の帯文は、三方に作られた圓形凹みを構圖中に取り入れた葉形を主とする三角つなぎ文で、主に朱で描いたうちに青綠色を點すること第一圖の見取圖の如くである(圖中細點を以ての部分)。この文様は漢代漆器である。

文に時に見受ける所に近い。

その四はカンサス美術館 (William Rockhill Nelson

Gallery of Art, Kansas City) に所藏する四虺透文方鏡

で、また新例として學けられる。この鏡も一邊の長三寸餘に過ぎない小形ながら、鏡背の透文は中央の鈕座が第二に録したと似た葉形の四葉から成つて、同じ葉形が外廓の四隅にもまた相對する様に布置せられ、この間に細長くして強く屈曲した有翼の虺龍形を配したもので、而して右の虺形は細部を表はしてゐる所に他の場合と相違を示して居り、なほ外縁の帶も縞狀に凸凹が作られてあることと圖版第二の上左に示す如くである。その背面から受ける印象は第一第二の例などに較べて稍々古拙に見える。次は溝の拙著に於いて嘉納氏の鏡例を示したと同じ四葉透文方鏡である。これは其後新たに二面の存在を知り得た。うち一面の大坂江口治郎氏の藏鏡(圖版第二 の中右)は、既に知られた一鏡と殆んど符節を合せた如く一致するものである。尤も出土後背・面の二つの部分のうち鏡背部は、銹を除いた爲か面部が鮮かな土中古の色澤を呈するのと違ひ、著しく外觀を損じ、透文が平面化して、影繪的な趣を強めてゐる。同鏡に較べると他の一面の

加奈陀トマント博物館 (Royal Ontario Museum of Archaeology, Toronto) 所藏品(圖版第三 二中左)は同じ構圖ながら、單に鑄上りがよいばかりでなく、禽形の表出が可なり丸味を持つて、その體軀の細部が細線で鑄出されて居り、外縁またうちに輪廓が三角形に近くなつた雷文帶を置くなどの點で違ひがあり、更に一部にもと青石を嵌入した形迹をもとめてゐる。但し現在見られる青石は出土後に修補したもの、様である。いまこの二者を併せて見ると前者か後者に基く後出の簡單化したものなる可きことに何人も考へ及ぶであらう。處が同様な實例は他にも存してゐる。その一つは近頃大坂山本信夫氏の有に歸した透文の一鏡(圖版第三 二下右)が拙著圖版第三九の1に載せた遺品と同式でありながら、透文が平面化した影繪的のもので、既知の例が虺形の細部を鑄表はし、なほ一部に象嵌を施してゐるのに較べると著しく簡單化したことが認められる。その二は昭和十一年十一月に淺野棗吉氏の將來した傳洛陽の出土と傳へる蟠螭透文鏡に見受ける所

で、徑四寸七分を測る鉛銅色の鏡背は、既に知られたウ  
インスロップ氏所藏鏡(拙著圖版第(三四の2))に相類するが、虬形  
は通じて平面的な便化の多いものと化し、また外縁に圖  
文なく、もと一部に加へた圓形の象嵌が單なる鑄文に依  
るものとなつてゐる點で、また前者と同じ趣を示すもの  
である。同じ鏡式に於けるか様な違ひを示す遺品の並存  
は、當然相互の間に形式の先後から更に作られた時代に  
前後のあることを思はしめる點で注意を惹くものと云ふ  
べきである。

一體この種の透文鏡は從來類品がなほ多くなく、普通の  
の鏡式とかけ離れた觀を呈し、引いてそれ等の形式觀な  
ど深く考へられないであつた。併し右の様な實例が現はれ  
て見ると、蟠螭透文系の諸鏡にあつても、また表はされ  
た虬龍の表出に形式上の先後を附し得るものゝあること  
が氣付かれて來るのである。して見れば透文鏡類また右  
の形式學上の見地から先後の關係が想定せらる可く、こ  
の場合肉を持たせた表出のものから段々と簡單な影繪的  
なものへの推移が考へられるのであつて、同代の銅器文

や他の金具に於ける同様な圖文と比較することに依つて  
一層その質らしさを加へ、既に知られた一般的な戰國式  
鏡と並んでその行はれてゐた事實を認め得ることに思  
ひ及ぶ次第である。

二三の新例から右の様な所見に想到したについて、是  
等の透文鏡とより、普遍的な戰國式諸鏡との並存關係が一  
見如何にも強い對照をなす如く見えるかも知れぬ。併し  
それに就いても、通有な戰國式鏡文の特徴がもと地文の  
上に段々と他の圖形を重ねて、後者が主文となりそれが  
影繪的な表出をとることにあるとすれば、上に別に推測  
した透文鏡の一群の透文の下に布帛が張られたことが認  
容せられるに於いては、透文に對して右の布帛は云はゞ  
地文的な位置を占めるものとなつて、兩者の間に基本的  
な面で相通するもののある事を考へしめるであらう。而  
してこの點は透文鏡の一群に於いて形式上後出の類に影  
繪的な趣の多いものが來るとする想定から一層その然る  
を感ぜしめるのである。

三

以上の透文鏡類に較べると筆者の其後囑目した戰國式鏡の主流をなす鏡例は、その數に於いて遙かに多數に上る。併しこれ等にあつては、前著に載せた聚成が多數の遺品に基いたものであるから、それに新たに歐洲支那方面の資料を加へて行ふたカールグレン教授の新聚成にあつても、細かな點で若干の違ひを示すものを除いては、特に目立つた新しい鏡式に乏しく、筆者の實見したのもまた同様である。この事は漢以前の主な鏡式に關する實際が今やほぼ確められた事を示唆するものと云はねばならぬ。たゞか様な現状の間にあつて、カールグレン教授が聚成の最初に擧げてゐるA群なるものは、細文地の上に主文を重ねた通性を示しながらも、構圖其他の上に特色を持つものを含んで居り、他の知見に上つた遺品にあつても地文や構圖の上に違つたものも亦全くないではない。依つて本項ではそれ等を順次列記して鄙見を加へることにする。

さてこの類として先づ擧ぐ可きは昭和十五年北京の市場に現はれて、現在大阪江口治郎氏の有に歸した一鏡である。これは徑三寸一分餘、縁の厚さ五厘と云ふ極めて薄くて小さなもので、褐銅の地肌（の1）に青緑の銹を着けて居り、背文亦細緻でさまで目立たぬ外觀を呈してゐる。併しその背面中央の鈕は双獸の相向ふた形を寫した立體的なものから成るのが珍らしく、圖文も仔細に見ると鈕座を繞つて三個の帶圈を存し、それに内から數へて一種の渦線文帶、珠點を地文としてその間に渦文化した獸形を容れた主要區があり、外帯に縵形紐帶文を配する點で從來知られた戰國式鏡の背文とは可なり様子の違つてゐることが認められるのである（圖版第1）。處が既に一寸觸れた様にカールグレン教授聚成のA群の鏡の中に、鈕は簡單な式ながら餘の部分（の2）がこれと相近い略同大（徑三寸）の一面があつて、その鏡では縵形紐帶文の外に更に子安貝を連ねた文帶が存して興味を加へるものがある（同上）。相似た帶圈の多い式で、外縁近くに同じ子安貝文の帶のある鏡は、同教授の聚成圖のA群に尙一面ある。この鏡

では稍々廣い鈕の周圍に六葉の花形飾を印して、渦文帯それにつき、外邊の子安貝文に至る間の主要區には處々にコマ狀の突起を作つた絡み虺龍文を配した點で、また特殊な趣を具へてゐる(同上)。

是等三面の鏡背文のうち第三面の主要區の虺龍文が戰國式銅器の或者に見受けるのと趣を一にするばかりでなく、通じて見る帶文も同種銅器によく用ゐられたものであり、殊に子安貝文の如きは、同代に特に著しく行はれたと解せられる。その第一第二の主文にあつても、同様な圖文が時に戰國式銅器文に見出すこと例へば京都藤井氏有隣館收藏の球形敦(鬚) (拙著戰國式銅器の研究圖版第四三参照) の如くである。さればこの類は當代の古銅器文と特に緊密な關係を持つ類と云ふ可く、カールグレン教授がなほ類品の乏しいにもか、はらず、上引の二例を一つの鏡式と見て、他と分つてゐるのは蓋し誤らない所見と思ふ。たゞ

教授が右の類と共に前著に一例を載せた(前著圖版第(三九の二))表出に肉を持つた怪獸文鏡をも一括して、是等をすべて西曆前六世紀の作品と見て、最も古い鏡式としてゐる年代

觀に對しては、右の戰國式銅器文との一致のみからでは、その古銅器の行はれた年代がしかく明確になし難い點よりし、又如上の實物の示す處に顧みて俄かに從ひ難い。これに就いては教授の戰國式古鏡全般に關する年代觀と聯關して後段に改めて觸れるであらう。

次に細地文の上に別な圖形を重ねて後者が主文をなす戰國式の古鏡に最も多い式中、や、目立つた新例をなすのは山本信夫氏の收藏品である。鏡は二面あつて、共に河南省洛陽金村古墓の出土品と傳へる。一面は徑四寸四分弱、他は四寸六分と云ふ相似た大きさのものであつて、前者の示す所(圖版第(四の1))、紐形鈕を繞つて方格があり、内區は前者の四隅に配した笹の葉形の圖文に依つて四分された各區に、尾部の著しく大形異様化の禽形をば影繪的に表はしたもので、また他はや、大きな圓鈕を繞つて、互に違つた花様四葉形文を内外に二重に布置して主文としたこと圖版第四の2に見る如くである。

二者の示す背文は一寸見た所では從來知られた遺品と大差のない外觀を呈するのであつて、殊に後者の外方に

置かれた四葉形に於いて然るを感じしめる。併しこの二鏡に於ける細かな地文は實は一種の怪獸形から成つてゐて、一つの單位文をば可なり違つた方式で全面に布置した點に特色を存し注意を惹くものがある。尤もこの地文は本例が初見ではなくて、京都守屋孝藏氏の藏する四葉座細地文鏡(前著圖版第二一)に既にそれを見たものであるが、あまりに細かい爲にや、看過せられ勝て、カールグレン教授の如きは、氏の聚成中に守屋氏の遺品と同一鏡式の洛陽出土と傳へる遺品を収録しながら、何等それに及んでゐない。

いま實物に就いての所見からこの地文の特徴を擧げると、所謂羽狀獸文をより、細かくした外觀を呈するその間にあつて、一部に特色のある眼球を寫した怪獸の顔面と、鋭い鉤爪を描いた鱗狀の脚とが目立つて居り、既に是等が整つた一つの形態としての位置が不分明となつた單位圖形を一方の鏡では、圖版第四の1に線で示した如く布置して鏡背を覆ふてゐるのである、而して右の單位圖文たるや二者が全く同一なばかりでなく、既知の二

面も同様であつて、そこに自ら相互の緊密な關係の存することに想倒せしめる。處が單位文の取り方や布置などを除くと右の地文たるや、從來知られた所謂饜飜文鏡(拙著圖版第四の諸鏡)と趣を同じくして、それを更に細緻にしたものなることが認められるのである。然らば兩者を結びつけて、こゝにまた全くそれのみで一つの背文をなした前者に對して、新例などは同式の一層細かになつたものが地文となり、その上に別個の圖文を重ねると云ふ一つの構圖の發展形を辿り得ることになる。この場合それが古銅器を特色づける饜飜的な怪獸文として、最も古い形態と見るべきもの(拙著第七圖例)をはじめ、通じての諸例が洛陽金村古墓の出土と認められる事實は、自から右の一系列の發展系がこの地區で行はれたものたるを推さしめると共に、兼てその上に古い銅器文の流れを傳へてゐる點が、その地の歴史的な背景と結びつく所のあることに想ひ及ぼしめて、興味を喚ぶのである。

序に記するが、上に取り上げたと相似て、而も獸形のみならず、それを二つ背合せに重ねて鏡背に布

置した比較に採用の所謂饗登文鏡の新例として、昭和十四年に一邊の長四寸八分の方鏡が本邦に將來せられて佐友男爵家の所藏に歸したものである。この鏡また洛陽方面の發見と傳へて、既に知られた瑞典國立博物館東洋部の收藏の方鏡と酷似してはゐるが、形が大きく、佳良な銅質を以てして極めて巧緻な鑄上りを示す點で、從來知られた同種の鏡式中最も優れたものとする。されば圖版第五の1にその寫眞を載せて前者との参照に供へる。

#### 四

戰國式鏡のうちで遺品の最も多い地文の上に別な文様を重ねた類に於いて、その地文に肉を持つた表出のものを——中で所謂變様羽狀獸文地が特に著しい——と細かな渦文地の二者が並び存し、その上に配した圖文にもまた差異のあることは嚮の拙著の圖版に依つて容易に看取せられる所と思ふ。而してこの點がカールグレン教授の聚成のうちに強調せられ、それに立脚した分類から年代觀にまで及んでゐる。右の聚成は拙著の資料に加へるに、

なほ未見の同國に於ける豊富な蒐集と支那に於ける遺品其他を以てして、重ねられた主文の違つたものを網羅したものの、引いて中にD9の如き僞古の品を混じた様な瑕瑾はあるが、今日なほそれ以外殆んど目星しい違つた遺品を見出さない程である。たゞ前著出版後に筆者の矚目した一二の遺漏を拾ふならば、圖版第六の1に示す鏡(ウインスロップ氏藏)が、やゝあらい細渦文地の上に一種の便化した線表出の四禽を重ねて、それが變様羽狀獸文地に重ねられた一類と同巧な點で、云はゞ中間的を趣を具へた珍しい例をなすものとして、又同圖の2に拓影を示す遺品は、細地文鏡に於いて、なほ類例の乏しい鏡背の主要部を内外の二區に分ち、それらに主文を配した鮮かな土中古色を呈する佳例(大阪淺野稙吉氏將來)として共に擧ぐ可きであり、更にその3の鏡(徑六寸四分、大阪江口治郎氏藏)は、細地文が從來なほ未見のものたる上に、主文にあつても、火焰狀と稻妻様の影繪的な圖文を主にして、隅に小さく退化形の虺龍に配する點で一の新例とすべきであらう。なほ右の外變様羽狀獸文



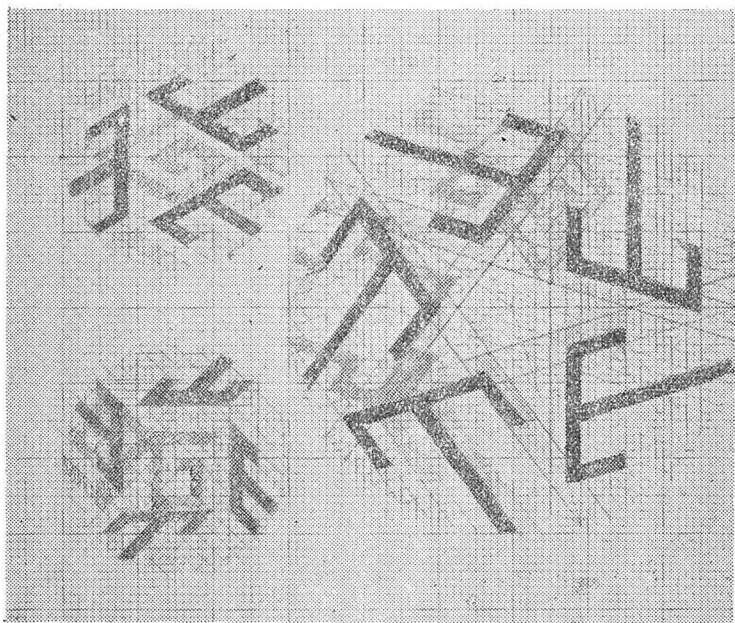
地山字鏡に薄肉の禽形を配した新例の加はつたこと、獸鈕人物畫象鏡一面が、鏡式自體は既知のものながら、構圖の持つ特殊な點からこゝに併せ記すること必ずしも蛇足ではあるまい。

二者のうち前者は徑四寸六分の鉛黒銅色をした完好な造品(圖版第(五の2))であつて、鈕を繞る方格と外縁から四出した所謂山字形の間に、既に知られた二例と同様な犬と虎とも覺しい獸形併せて四つを容れてゐる。處が右の獸形は三鏡の間に通じて全く同じ形のもつと、然らざる類との並存が注意せられる。例へば他の圓鏡(拙著圖版(第一一1))に見る牡鹿の如きが然らざる例であり、番犬の如きは三者に通じて見受けるものとす。この事實は是等の造品が同じ鑄造所で作られたことを示すと共に、また種々の獸形が用意せられてゐて、背文の構成に任意に用ゐられたことをも想定せしめる點で興味を感じしめるのである。後者は壽縣の出土と傳へ、もと破碎してゐたのを接合して完形に復したもので、背文の鑄上りは鮮鏡に缺けた處あるも、人物畫象の示す所フリア美術館收藏の(拙著圖版(第三〇の2))

一鏡と符節を合せた如く一致して、その同じ鏡範から出た所謂弟鏡なることを推さしめる。されば圖版第六の4に寫眞を載せて参照の便に供へる。

さてこの種の最も數の多い全面に布置した地文の上に他の文様を重ねて、後者が主文たる構圖を形成する類にあつて、特に目立つ主文は、一種の禽獸文と、所謂山字文即ち丁字形を主とする幾何學的なそれとであつて、禽獸文の方が細かな地文の上に加へられて影繪的な趣を示すものが多く、兼て一部分に肉を持つた線表出に依る行方で羽狀獸文地の上に重ねられてゐるのに對し、山字文は寧ろその反對に殆んど變様羽狀獸文地に限られてゐる事が認められる。處がこの後者に於いて同時に注意されるのは、類品の多いこの種構圖が通じて正しい配列をとつて、そこに幾何學的な趣を備へて、自から本來の構圖に當つて規矩を以てしたことを豫想せしめる點である。主要な所謂山字形なるものゝ意味に就いてはなほ深く究められてゐないが、この洋文字のTの頭字を斜にした如き主文の構成分子は、少ないものは三つから、多い

のは六個を以て全圖様を形成してゐて、中で四個と六個



第二圖 所謂山形字鏡構圖想定圖

のものを主とする。是等の一々の配布を見ると、その四個のものにあつては、鈕座の方格や、他の併せ布置した圖様に依つて必ずしも同一と云ひ難いが、餘のものにあつては孰れも同じく、それが如何にも正確に丸い圓圈内に布置せられ、六個の例にあつては鈕を中にして別に一種の星狀文をも併せ示して、それ等の布置の上にもと嚴密な割當ての行はれた事を思はしめる。故中尾万三博士は早くこの點に注意して、右の背文の實際から、構圖者がもと圓を三・四・五・六等分すると云ふ幾何學の知識を持つて居り、それに基く一種の割當てが所謂雷文的な文様と結びついて、所謂山字文が作られたものであるとする想定に達し、拙著公刊の春、第二圖に挿入した様な右の割當圖を試作して筆者に寄せられたのであつた。

不幸にして博士は同年の夏に道山に歸されたが爲に、右の試作圖のみ残り、それに就いての一層詳しい所見を永久に聽き得なくなつたが、併し示された圖に依ると、如何にも所謂山字鏡の正文はか様な幾何學上

の嚴正な割當てから出たことを首肯せしめるものがあり、彼の所謂山字形の兩端が洋字のTの頭文字に於ける如く、一端に三角形の尖りのある異様な點なども、右の割當てに依る必然的な表はれたることを知り得て新たな感興を覺えるのである。矢島恭介君が嚮に『考古學雜誌』第三卷第五號に載せた獸首鏡と夔鳳鏡なる論文に於いて、兩者の構圖のうちに前代の系統を承けたものあることを説いて、細地文に重ねられた圖形の或者の中にその幾何學的な構成を暗示する圖を掲げてゐること、この點から見た顧みらるべきであらう。かくてもと怪異な動物文が華文流置化する傾向を示す間にあつて、他面にこの様な嚴密な割當に依る構圖が行はれたとする認識は、その時代相を考へる上に當然留意せらるべきであり、兼てまた支那の戰國時代に圓を三・四・五・六等分する等と云ふ幾何學上の知識が既に行はれた實證として、同國に於ける數學の發達をも物語る點から自然科學者の關心をも高めることに想ひ及ばしめるのである。

## 五

以上記した様な漢以前の古鏡に關する知見の充實に伴ひ、うちに種々の違つた鏡式の存在が認められるに至つたに就いては、通じて是等の間に看取せられる推移の大本の間にあつて、それ自體の鏡式の先後に關する位置づけから、進んで年代觀が問題となるのは自明なことである。カールグレン教授の論著が鏡式の分類から、それに入つてゐるのはまさに然るべきことと思ふ。但しこの點になると、問題の鏡には、鑄造の年時を明示するが如き遺品を缺くのは固よりのこと、單に銘文を有するもの、如きも、なほ主として後出の類に限られると云ふ有様であり、更に望ましい考古學上の伴出物に關する正確な知見をも殆んど缺如する點から、考察を非常に困難なものとしてゐる。筆者の嚮の所論はか様な實狀から、既に組織づけられた前漢以降の鏡鑑沿革の知見に立脚し、これを十年來明瞭の度を加へた戰國式銅器文の實際と比較の上、是等を以て戰國代から前漢中期以前に互る時期に屬

するとする大體論を得たが、各個の鏡式に就いてはうちに見受ける推移に依つて、それ／＼の先後を推すことの可能を説くにとゞめるの外なかつた。これに對してカールグレン教授の所論は、どうしたことか二重の鏡體よりなる透文鏡を主とする一群を除外して、他の諸鏡式をば八類に分ち、これ等が西紀前六世紀から前二世紀に互る五世紀間に行はれたものとなし、更に一々の鏡例に對して行はれた時代をば凡そ百年を單位として明白な實時代を附してゐるのである。教授が現に知られた多數の遺品を整理分類するに當つて、筆者が嚮の著書に於いて考へ及んだ處に検討を加へ、それを發展せしめて、所謂戰國秦式鏡の主流をなす類として右の八類のみを採り、是等の諸鏡式の特徴をば一層明確に把握するにつとめたことは、その形式觀先後の關係を辿るに容易ならしめたものとして大いに推重すべきであり、引いてよしやうちに透文二重鏡體の遺品其他を除外した憾はあるとしても、そこに現下に於ける最も優れた、同代鏡の形式觀の一つが示されてゐるものなるを思ふのである。

さりながらその一々に附與せられた年代觀に至つては、記述を通じて、相當な用意を以てなされたことを推し得る次第ではあるが、その根底の上に教授の有する所謂淮河式、即ち戰國秦式銅器に關する年代なり區域に依る異同觀が可なり強く投影せられ、それをば取り上げられた上記の鏡式に比當することになつた結果、各の鏡式をば時に百年他は四百年もの間繼續したと云ふが如き鏡背文自體に通じて見る推移を把握する點に就いての用意に缺くる所があり、その點で鏡自體の示す處から所説に疑議を挿まざるを得ないものゝある事を遺憾に思ふ。

教授の示されてゐる是等の鏡式の行はれた通じての年代觀に就いては、從來の所見と大差ないわけであるが、それをば學示せられてゐる鏡式の一々に年代を割當るとなると、實物に時代を明示するものがない點からする確實性を缺く點を暫く除外するとしても、そこにいろいろと考慮を要するものがある。と云ふのは現在知られた鏡式が果して當代行はれたすべてを網羅してゐるや否やの問題をはじめ、作られた地方に依る鏡式の差異如何に對

する點が、果して古銅器の場合と同一視すべきや否や等前者の推定に緊要な關係を持つものとして、それ自體の檢討が要請せられるからである。處が現實の問題として、教授の取り上げられてゐる以外に、透文鏡其他の二重鏡體の一類があつて、その占める位置がなほ確め難く、また地域に依る鏡式に就いての知見が現在なほ殆んど缺けてゐる處から、嚮の一書に於いては鏡式の先後の關係を推すにとゞめて一々の實年代の比定を差控へる外なかつた次第である。處が教授はか様な點に對して考慮することなく、現實に存する透文其他の二重鏡體の類を全く除外し、又地域に依る鏡式の差異なども、それ自體に就いて深く究める所なく分類せられた八鏡式をば個々に實年代を定めて、想定の大體の年代觀のうちにも收めてゐるのである。されば初にも擧げた如く鏡自體に年代を明にするものゝないこの場合、それに一々の鏡の行はれた時代に一二世紀と云ふ廣い幅を持たせてゐることがかへつて實際にそぐはない結果となり、鏡式に依つて或者は永く、また他は短いものとなるなどと云ふ、形式の推移な

り遺品自體の示す所と實際の上で矛盾する點が出て來てゐる様に見える。いま試みにか様な一例を擧げるならば、所謂變様羽狀獸文を地文とする鏡式（C類）にあつて、單なる縁の差異から、同じ地文の鏡の間に百年の差を附するの可能を考へてゐるが如き（C6とC2参照）或は右の單なる地文を以て背面を飾つたものに對して、その上に別な圖文を重ねて構圖に新しい意匠を加へたものを遙かに下る前三世紀に實年代を置くが如きそれである。鏡背文の發展に於いて、當初他から借りて來た文様を布置した單なる地文（即ち教授のCのばしめのもの）から、その單調に對する自からなる考案として、該地文の上に他の圖文を加へて、それが一つのまとまつた構圖を持つたものとなる推移は現存例から充分に辿り得るから、形式上右の單純なる地文鏡が古く、他がそれよりも時代のおくれるものたるべきことは考へられるが、而もこの場合、上に重ねられた文様が段々と整ふて行く間に教授想定のおく、その間に百年と云ふが如き永い段階があつて、當初のそれと整美したものとの間に四百年もの

年月を想定するが如きは、あまりに間伸びのした見方であつて、到底現實にあり得ることではなく、引いてか様な見地から學例の一々に附した實年代説には従ひ得べくもないのである。右と聯關して博士の實年代説中で異様な對照をなすのは、そのG式なる一種の渦文を地文として布置したのから、それに八弧文等を配した類に對しすべて前三世紀なる時代を附してゐることである。この比定は蓋し該地文が所謂漢式文に多いと云ふ所から來てゐると思はれ、そこにまた地域に依る考慮の加味なども推し得ることながら、而も當代一般の鏡背文の變遷に徴し、殊に前者の所見と較べるに於いて當然それに疑念が懷かれるわけである。

更に教授がA類として新たに挙げた四面の鏡——その或者に就いては本文の前段に紹介する所あつたもの——をば、すべて前六世紀のものとして饗餐文鏡と並んで現存最古の鏡式としてゐる如き事に對しても、その根據として是等の文様が戰國式銅器に酷似した點の多いことが數へられるとしても、その四例が表現の手法其他の上で

同一視し得ない事はA3・A4との比較から明かであり、A4の如きは主文の上で寧ろD類との同似を示す點で早計とするの外あるまい。戰國秦式鏡の背文がその古式のものに於いて圓背に單に銅器に見る文様を重ねた趣の多いことの明瞭な間にあつて、この類が既に鈕を中心として一つのまとまつた構圖を示すのはまさに注意せらるべきことながら、この場合同じ類として鏡體は二つから成る點で著しく違ふとは云へ、また鈕を中にして一つの纏つた構圖を示す透文其他の鏡式が併せ顧みられることに依つて、その性質がよりよく理解せらる可きものあるを思はしめる。而して後者の類が遺品の増加に伴ひ、うちに形式の先後を想定し得ること前段に記するが如くであつて見れば、是等の所見の上に年代觀が組立てられてこそ妥當なものたり得るわけである。こゝで筆者はまた新出の資料に基いて、教授がD類に加へた一鏡(D53)の地文が、實はB類の4乃至5との間に緊密な關係を持つて、それが彼の細密化した一種に外ならず、これと同じ地文に別な主文を重ねた新出の遺品と併せ見ることに

依つて、是等相互間の連繫を辿り得た事實も、教授のそれ／＼に與へられてゐる年代觀からすると、其の間に二世紀と云ふ大きな空隙があることになる缺陷を指摘せなければならぬ。

## 六

以上記する所から教授の努力にもかゝらず、一々の戰國秦式鏡の實年代觀に對して尙疑を挿むべき餘地が多く、従つて俄かに據り難きを明にし得たと思ふ。但し右は結局に於いて何人にも免れ難い缺陷を指摘すると云ふ、云はゞ否定的な立場からする所論に過ぎないとも見られ得る。吾々の期する所は、それにあるのではなく、教授の所見に啓發されて、その積極的な建設への推考であらねばならぬ。この場合支那本土が十年も近く戰場の巷と化して、右の考察に不可欠な遺品を藏する遺跡の學術調査に就いての知見を全然得難いことが、最大の支障として横はつてゐることを憾まざるを得ない。併し資料の増加と學術への關心とは、古美術品化したこの種遺

品にあつても、段々と出土地に關する所傳を伴ふと云ふよろこぶ可き傾向を示して、右の所傳が後に概ね依據すべきものなることの實證される例を加へつゝある現狀に鑑み、漢以前の古鏡分布の地域と、それに關聯した鏡式の異同に就いての考察に示唆を與へるものゝあること蓋し注記せらるべきであらう。

從來この種鏡鑑發見の地區としては、壽縣を中心とした淮河の流域が著しく、これについて金村古墓出土品を含む河南省洛陽附近が擧げられてゐる。今日の知見に於いても右の二地方から齎される遺品の多いことに變りはない。たゞ嚮の一書の公刊後、湖南省長沙の古墓からの發見例がコックス氏 (John H. Cox) の實見から確められた外、梁上椿氏の『嚴箱藏鏡』解説に記する出土地の所傳に依ると、河南省では輝縣、開封府、汲縣、新鄉縣等に於ける出土が數へられる外、河北省の易縣、陝西省の西安附近などに互つてゐて、分布の區域を廣めて居り、その易縣の縣城西南の塘湖村からは變様羽狀獸文地四山鏡範の出土を傳へて興味を加へてゐる。

いま是等の出土地の所傳を持つ遺品と鏡式との關係を顧みると、段々と範圍を廣めた地域を通じて、而もその間に地方に依る鏡式の相違なるものがあまり認められない。尤も一種の饗飡文鏡（教授のB類）の如き、また如上のA類の出土地の所傳あるものが洛陽附近に限られた様に見えなどするが、爾餘の鏡式にあつては透文二重鏡體品を含めて、すべてが壽縣を中心とした地域に存し、同式のものがまた洛陽でも見出され、自餘の地區の出土品は二者のうちの通有な鏡式に屬することが知られる。なほ學術的な調査を缺く今日、右の所見を以て直ちに本來の事象を傳へてゐると斷ずることは固より危険であるが、これを單なる偶然のものとするにもまた遺例が多きに過ぎる。假りにそれに幾何かの事實を反映するとすれば、漢以前に行はれた鏡式は一部を除いて、當代の支那の文化圏では普遍的なものであつたとせなければならず、引いて鏡背文に關する基本的な傾向が年代の先後を考へる上に重要な意味を持つことになつて來る。

然らば現存の遺品の大觀から認められる鏡背文が、圓

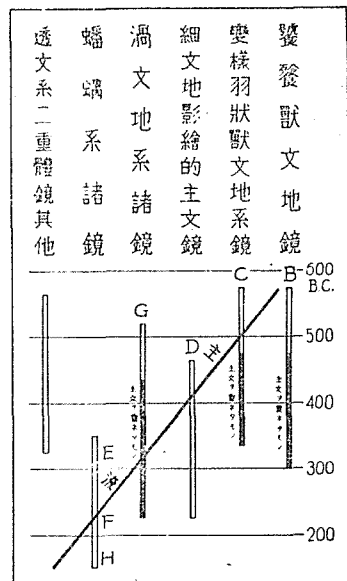
圈内に布置された鏡背と地文との二元的なものから、段々とその上に別な圖文を重ねて、この後者が段々とそれのみで一つの背文として整美な域に達し、これに反してもとの布置文が影を沒すると云ふ傾向は、重ねられた主文の示す處に併せて、年代觀の基準とするに重要なものたるものが改めて強く意識せらる可きであらう。右の主流に對して饗飡文鏡の如き、また教授のA類や、透文二重鏡鏡の如きは一見特殊な色彩を持つものとして、それ等が如何なる位置を占めるか、問題となるのであるが、それ自體に即する觀察から饗飡文鏡系に於いて既に擧げた如き同様な並行的な事實が認められ、更に透文鏡にあつても、既記のうちに布帛を張つた點が地文的な意味を持つとすれば、同じく一般的な傾向中の一つの特徴な例と見得ることが考へられる。果して然らば通じた年代觀中に於いて、それらの占める先後の關係がまた推されることになるわけである。

そう云ふ場合假りに質年代を附するとせば一見教授の如く百年位を單位とすることがよい様に思はれるが、右



の所見から既記のC類が單なる地文鏡から、それに若干の葉文を加へたもの、更に一段と文様の整つたものと、一つ宛に段階を設けて一世紀宛年代を異にするとしたことと、同じく單なる地文を配した式でありながら、右の地文が細密な故を以て實時代を三世紀も後となし、更にこゝではそれに他の文様を重ねた類をも同じ時代の所産とする如き點が、他方手法の違ふA類をすべて同じ前六世紀のものとする事等と共にあまりに機械的なものとして據り難く、そこに右の通じた傾向が實物に就いての一層精緻な觀察と相俟つて、今の場合か様な缺陷を充足せらるべきことを思ふのである。かくて初に挙げた新に屬目した遺品に關する若干の考察がその點に於いて示唆を與へて、教授の實年代説の修築にも役立つことが考へられる次第である。いま試みに如上の見地からする筆者の懐く戰國秦式諸鏡の主な鏡式の實年代觀を表示してこの文の結びとしよう。

表中の黒線を以てした斜のそれは、別に考へらるゝ主流を示したものである。右の大綱に依る推移の間にあつ



て、新しい類と共に本來の地文のまゝの式の依然として並存し得ることは云ふまでなく、その實際は遺物個々に即して判すべきであるが、さればとて教授の如き一々に百年もの差異を設けることの實際にそぐはぬことを重ねて注記したい。